

厳島神社蔵「平家納経」－平清盛とその魅力－

令和3年5月22日

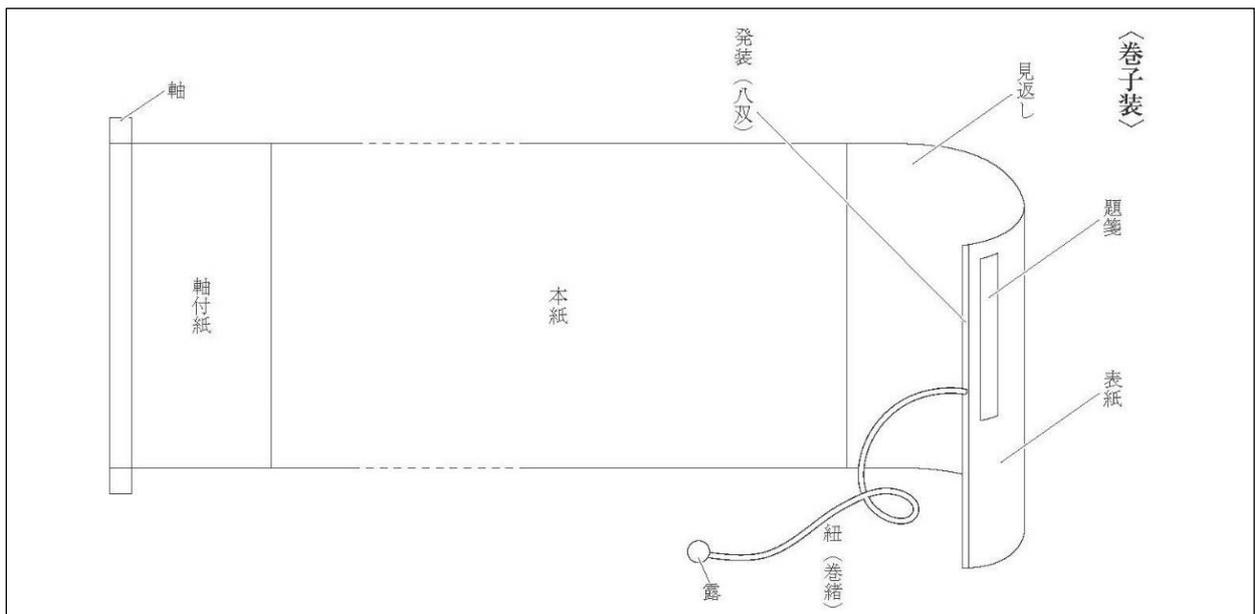
恵美千鶴子

概要：

平家納経（国宝、広島・厳島神社蔵）は、平安時代末期に平清盛（1118～1181）が厳島神社に奉納した経巻です。『法華経』一品経 28 巻と、開経『無量義経』、結経『観普賢経』『阿弥陀経』『般若心経』、平清盛筆「願文」を合わせて全 33 巻あります。ほとんど全巻にわたって染紙に金銀箔が散らされており、箔押し、版木による雲母摺りもあり、金銀泥や群青緑青を使った極彩色の下絵が施され、中には十二単衣姿で引目鉤鼻の平安女性が描かれた巻もあります。また、題箋や八双、軸首には繊細な文様が彫刻された金銀、水晶、ガラス細工が使われています。そして、その装飾の上に、清盛や弟の平頼盛、当時の能書（書の巧みな人）や経師（お経を書く職業の人）が经文・本文を揮毫しています。以上のように平家納経は、隅から隅まで絢爛豪華に荘厳された、装飾経の代表作といえます。平家納経を奉納した平清盛と当時の歴史的背景をご紹介しますとともに、これほどの宝物を一巻も欠くことなく現代まで伝えた厳島神社と宮島の歴史に触れながら、平家納経の魅力に迫ります。

1、平家納経の魅力

* 卷子本（かんすぼん）とは



・ 題箋（だいせん）・表紙（ひょうし）・見返し（みかえし）・発装／八双（はっそう）

・ 巻緒（まきお）・露（つゆ）・本紙（ほんし）・軸付紙（じくつけがみ）・軸（じく）

☆ 軸の頭は軸首（じくしゅ） ☆ 本紙の裏面は紙背（しはい）

*平家納経は巻き姿だけでも美しい。

題箋や八双、軸首、巻緒、露の装飾が見える



平家納経 提婆品 (模本)

◆平家納経 ^{だいばほん} 提婆品第十二 (表紙、見返し、本紙)

- ・平頼盛 (清盛の弟、1133~86) が書いた経文
- ・「^{よりもり}龍女成仏」(女性の成仏) を表現した表紙絵・見返し絵
- ・龍、宝珠、宝塔、(軸首)

◆^{きんぎんそうりゅうもんどうせいぎょうぼこ} 金銀荘雲龍文銅製経箱 (平家納経を納める経箱)

- ・五輪塔 (宝塔) と龍

◇^{こんしきんじほけきょう} 紺紙金字法華経 卷第一 (厳島神社蔵) (見返し、本紙)

- ・清盛が数行~数十行書いたあと、つづきを頼盛が書く
- ・^{おくがき}奥書に書写年月日と清盛が何行書いたのかを頼盛が記す

*龍宮 (厳島神社) と龍女 (厳島神) のイメージ 女性神→龍女 龍神

- ・平清盛：女性神と考えていたかどうかわからない。^{かんぜおんぼさつ} 観世音菩薩・^{だいにちによらい} 大日如来 (本地垂迹)
- ・承安4年 (1174) 「^{けんしゅんもんいん}建春門院厳島詣願文」：厳島神を「大日」、「貴女」であるとする。
厳島神社を「龍宮」とし「如意之珠」(宝珠) を得ることができると述べられている。
- ・治承4年 (1180) 3月28日、『^{たかくらいんいつくしまごこうき}高倉院厳島御幸記』で、厳島神社を「龍宮」。「宮島」
- ・『平家物語』卷二「卒塔婆流」：「是はよな、婆竭羅竜王の第三の姫宮、胎蔵界の垂迹なり」(厳島神が龍女であるとされる場所)
- ・『長門本平家物語』卷五「厳島次第事」：「厳島大明神と申は旅の神にてまします、仏法興隆のあるじ、慈悲第一の明神なり、^{しゃがら}沙竭羅龍王の娘八歳の龍女にはいもうと、神功皇后にもいもうと、淀姫にはあねなり」

◆平家納経 ^{ほうとうぼん} 宝塔品第十一 (本紙、紙背)

- ・宝塔 (五輪塔)
- ・紙背全体に広がる^{あしで}葦手の風景：左から右に向って、春~冬の風景と『法華経』の経意

2、平清盛と厳島神社

◆平家納経 平清盛筆 ^{がんもん} 願文 (見返し、櫛筆文書、本文)

- ・^{くしふで}櫛筆文書：「櫛筆／仁安元年十一月十八日／内大臣平朝臣清盛」(仁安元年 [1166])
- ・清盛が厳島神社を信仰するきっかけ：一沙門がこの社に祈請すれば必ず発得すると語ったため、それ以来、厳島神社を信受している。そして、その夢感に誤りはなかった。
→『平家物語』卷三「大塔建立」(清盛が高野山で厳島神社に関する宗教的体験をしたこと)

- ・「^{じんぜんじんび}尽善尽美」：善を尽くし、美を尽くす
- ・平家納経奉納当時（長寛2年〔1164〕）の嚴島神社の社殿（宝蔵）：願文には「宝蔵」に平家納経を安置すると記されている。
 - *嚴島（宮島）：神の島として崇敬されてきた。嚴島神社は推古天皇元年（593）鎮座。
- ◇社殿の記録：仁安3年（1168）11月「伊都岐島社神主佐伯景弘解」^{いつきしましや}（^{さえきのかげひろ}檜皮葺き）
- ・^{しんでんづく}寝殿造りの社殿と、^{みやこ}京の行事（管絃、舞楽）

3、現代まで大切に伝えられた平家納経の歴史

- ◇建長2年（1250）8月2日「いつくしまの宝蔵失物注文」（野坂文書331）
 - ・^{いっぽんぎょう}一品経（平家納経）16巻が盗まれる。
- ◇嘉元4年（1306）以降に記された文書「一切経内焼残分目録」（野坂文書340）
 - ・一品経ほか（平家納経全巻）が記録されている。
- ◇^{たなもりふさあき}棚守房頭（1494～1590）が残した記録『房頭覚書』
 - ・宝蔵の管理強化。
 - *この頃には宮島（嚴島）に人々が住んでいた。
- ◆平家納経 平清盛筆 ^{がらんもん}願文（本文、表紙、見返し）
 - ・願文（漢文）の読み解きが行なわれる
 - ・表紙・見返し：^{たわらやそうたつ}俵屋宗達（生没年不詳）による絵
 - *慶長7年（1602）に福島正則（広島城主、1561～1624）が行なった平家納経の修復
- *江戸時代の旅行者 嚴島神社の^{ぼくりょう}曝涼と宮島の人々
- ◇^{なべしまたすなおえだ}鍋島直條「遊嚴島」「再遊嚴島」延宝4年（1676）3月28日、法華経28品閲覧
- ◇^{よこいぎんこく}横井金谷『金谷上人御一代記』文化7年（1810）宮島を訪れる
 - *平家納経を図で紹介する
- ◇文政8年（1825）『^{げいほんつうし}芸藩通志』：「平氏一族奉納経巻」、藩命により編纂された
- ◆平家納経 ^{ひゅほん}譬喩品第三（見返し）
 - ・『芸藩通志』では、波と蓮華の^{からず}空摺りが際立つ
- ◇天保13年（1842）『^{いつくしますえ}嚴島図会』全10冊。巻6～10は『嚴島宝物図絵』
 - ・「平家納経」と呼ぶ。全33巻を^{もくこく}模刻して紹介（モノクロ）
- ◆平家納経 ^{あんらくぎょうほん}安楽行品第十四（表紙、紙背）
 - *明治時代、博覧会や博物館で平家納経を紹介



平家納経 安楽行品（模本）

4、平家納経をみる

◇明治 15～17 年（1882～1884）「嚴島神社蔵経模本」8 卷、東京国立博物館が作成

- ・表も裏も一度に見せられるような模写

◆平家納経 薬草喩品第五（見返し）

- ・表紙、見返しの裂を交換

◆平家納経 囑累品第二十二 見返し

◇『温知図録』（殖産興業のための工芸図案集）（東京国立博物館蔵）

*明治宮殿（明治 21 年〔1888〕に完成した皇居）の室内装飾に

◆平家納経 提婆品第十二（紙背）

◆平家納経 授記品第六（表紙、見返し）

- ・洲浜と波の文様

*近代国民国家による文化財管理／「美術」の誕生

- ・分類して整理、保存。平家納経は書跡→絵画に。

- ・明治 30 年（1897）12 月、平家納経は絵画として国宝（旧国宝）に指定

◇明治 33 年（1900）にパリ万国博覧会に出品『稿本日本帝国美術略史』

◇明治 30 年頃撮影の古写真（原版は東京国立博物館蔵）

- ・金工として平家納経を紹介

◇大正 9～14 年（1920～25）田中親美が副本制作（「平家納経（模本）」）

*平家納経は絵なのか書なのか。神宝、仏典、神仏習合

5、平家納経に込められた祈り

◆平家納経 嚴王品第二十七（表紙、見返し、本紙、紙背）

- ・祈る女性
- ・極楽浄土の風景
- ・能書（書の巧みな人、書家）の書



平家納経 嚴王品（模本）

参考文献：

恵美千鶴子「嚴島神社蔵『平家納経』受容の歴史」（『東京国立博物館紀要』56号、2021年3月）

同「『平家納経』込められた祈り」（『墨』270号、2021年5月）

同「平家納経を考える」1～4（『BIO CITY』83～85・87号、2020～2021年）